

選評

太田智子

フィレンツェ、ポッジョ・インペリアーレ離宮の内部装飾の図像解釈

本論文は、17世紀初頭、マニエリスムからバロックへの移行期にあったフィレンツェにおいて、女性摂政マリア・マッダレーナ・ダウストリアが、ポッジョ・インペリアーレ離宮の「謁見の大広間」および「大公妃の寝室」の2室に描かせたフレスコ壁画の図像解釈に取り組み、説得力のある新知見を提示している。

太田氏は、数少ない先行研究において既に指摘されている図像の典拠文献に齟齬があることを示したうえで、新たに文学的典拠や図像ソースを指摘し、その主題の意味するところが、マリア・マッダレーナの、そしてひいては当時のトスカーナ大公国の政治的立場を表明していることを明らかにした。近年の近世ヨーロッパ史研究にあつては、女性支配者の歴史的評価が再考される動向の中で、トスカーナ大公国の女性摂政期も強く関心が持たれるようになっており、本論文は美術史学の方面からその流れに掉さず意欲的な研究である。

本論文では、上記の2室に描かれた全部で20場面ある名婦伝場面から、特に主要な《トスカーナ女伯マティルデ・ディ・カノッサ》《ポルトガル王妃イサベル》《プルケリアと弟テオドシウス2世》《聖女ヘレナによる聖十字架の発見》の4場面を論じている。マティルデ女伯とプルケリアの場面に関しては、シルヴァーノ・ラッツィの『聖性により著名なる女性達の伝記』が文学的典拠として新たに提示される。図像ソースの博搜に関して特筆すべきは、画家マッテオ・ロッセッリ自身が参画した、儀式の仮設装飾の報告書等にも目配りがなされていることである。当時の画家は、通常の絵画制作に加えてエフェメラルな仕事も手掛けたが、両者の関係性を具体的に指摘したことは意義深い。

その上で、注文主マリア・マッダレーナにとっての当時の懸案事項を史資料から再構成し、同時代的な文脈からの再考が行われる。太田氏によれば、本壁画は女性摂政が率いるトスカーナ大公国新政府の立場を視覚的に表明している。その立場とはすなわち、教皇ウルバヌス8世の支持、兄である皇帝フェルディナント2世と連携した異教徒およびプロテスタントとの対峙、そして聖遺物崇敬を正当とするカトリック改革期の教会擁護という、政治・外交・宗教上の3点である。このように、4場面において特殊な図像が選択された背景として、女性摂政の思惑を次々と的確に浮かび上がらせていく太田氏の手腕には迫力すら感じられる。

その背後には地道かつ膨大な検証作業があつたことが、本文及び注釈における情報量からうかがえ、まさに労作というに値する。

ただし、これら4場面における女性摂政の政治的立場のアピールが、十分な説得力を持って鮮やかに論じられているが故に、それではそれ以外の16場面はどのように考えられるのかということが気にかかるのも事実である。今後、2室の壁画全体の図像プログラムについての太田氏の研究が十全なかたちで示されることが期待される。

以上により、太田智子氏に『美術史』論文賞を贈り、その努力と功績を称えたい。